

松岡温彦学兄

松岡温彦さんは私の高等学校の一年先輩である。共に一九四〇年生まれであるが、早生まれと遅生まれで学年が分かれた。その高等学校とは早稲田大学高等学院である。

松岡さんとお話した時、共通の先生について話した。この学校では一年生から第二外国語があり、ドイツ語、フランス語、もしくはロシア語を取らなければいけなかった。松岡さんと私はドイツ語を選択したという共通点があった。そしてドイツ語を担当した共通の先生について話した。この先生は坂崎乙郎先生であった。いつも挨拶もなく授業は始まった。やっと「もはや戦後ではな

い」という事が言われた。昭和三十二年のことであった。

坂崎先生は美術史の研究にドイツに留学され、帰国直後の授業であった。当時外国へ留学するな ど極めて稀なことであった。ドイツ語の授業から脱線し、パウハウス、パウル・クレイの事な どを話してくださった。高校生には勿体ない授業であった。ある時「クレイやカンディンスキーの 絵は素晴らしいが、戦争で息子を亡くした母親が描いた息子の絵ほど、真に迫るものはない」と言 われた。坂崎先生の授業には刺激を受け、いつかはドイツの留学生試験を受けてドイツで学びたい とひそかに思った。その願いが叶い一九七一年からベルリン工科大学の研究所で学ぶことができた。

「ドイツ語の文法を覚えなければ試験に通らないよ」という教授法でなく、ドイツ語を学べばこん な楽しいことにありつけるといふ教育であった。筆者も後になって教職についた。文部科学省の指導により、学期のはじめにはこのような授業をするという授業計画書を出させられた。学期の終わ りには学生に「授業計画書通り進められたか、休講はなかったか、脱線はなかったか」等のアンケートが配られた。これを事務局が整理し、結果を教員に戻してきた。このような方法では坂崎乙郎 先生の評価は最低になるのではないだろうか？

しかし松岡さんとは高等学校で良い師に巡り合ったことを喜び合った。何しろ、大学入試無くして 大学へ進学できる有難さがあった。本来なら受験勉強に明け暮れなければいけない高校三年生で、 坂崎先生の影響もありブルノ・タウトの『日本美の再発見』(岩波新書)を読んだ。その結果「建 築家の仕事はこんなに幅が広いものか」と感激し、建築学科へ進学することとなった。そして今も ブルノ・タウトやパウハウスの研究を継続している。

つい先日、本棚を整理していたら、坂崎先生が教科書として使用されたテキストが出てきた。高 等学校の教科書は全て処分してあったが、この教科書だけは想いがあり、処分できなかった。ハイ ンリヒ・ハイネが著した『ドンキ・ホーテ論』(Georgs Oeichrodes Gynthe)である。少し 読み直してみたが、今読んでも難しい本である。よくドイツ語を勉強して二年目にこんな難しい本 と取り組んだものと驚いている。松岡さんがご健在ならこの本を齎に再び坂崎乙郎先生について語 り合いたかった。

(たなか・たつあき ブルノ・タウト研究者、お茶の水女子大学名誉教授)

田中辰明